

## 応急復旧の水路に通水

氷見・島尾 営農関係者が安堵



能登半島地震で大きな被害を受けた氷見市内で26日、応急復旧した農業用水路に通水が始まり、写真、五位ダムからの水が水田に供給された。作付けに間に合った地元の営農関係者からは安堵の声が漏れた。

島尾地区では国や県、市

市土地改良区、地元の関係者約40人が集まり、担当者がバブルを開けると、同地区の一部8・8畝の農業用水路に水が勢いよく流れ、国・県営が担当する排水事業によるパイプラインの応急復旧を喜んだ。

市土地改良区の江添良春理事長が応急復旧に携わった関係者に感謝した上で、「トラブルも危惧されるが、不測の事態に備えたい」と節水を呼び掛けながら、国や県、市とも連携して対応に当たるとした。

氷見市内では22日現在で水路1216カ所を含め農業用施設1874カ所が被災。用水路で国営幹線(総延長27・1キロ)の上庄、南条地区の幹線9カ所に続き、県営支線(115・2キロ)の18カ所や、末端水路(約1千キロ)の27カ所の計54カ所で応急復旧を終えた。

## 公費解体費を専決

水見市  
4月補正能登半島  
地震

水見市は26日、能登半島地震で全壊や半壊した家屋などの公費解体や液化化対策工法検討の費用を盛り込んだ2024年度一般会計補正予算7億4068万円(累計272億8468万

円)を専決処分した。

【関連記事1面】

公費解体は道路をふさぐなど緊急性を要する5件について先行実施しており、5月から本格着手する。対象は約850件を想定する。復旧復興ロードマップでは25年度までの2年間で完了を目指しており、1カ月当たり40件の処理が必要

と考えている。補正予算に5〜6月に見込む80棟の解体撤去費用などを計上した。7月から来年3月までの事業費は6月補正で対応する。

4千万円を計上した液化化対策推進事業は、被害エリアを詳しく調べるレーダー測量や液化化発生の簡易判定などを行い、複数の対策工法案を検討する。

10月に地盤工学や建築、土木の専門家ら4人程度で

つくる技術専門委員会を設けて対策工法の意見を聞き、24年度内に対象地域と工法を決める。

農業用水路仮復旧  
田植えに間に合う

能登半島地震で被害を受けた水見市内の農業用水路の応急復旧が終わり、26日から農地への供給が始まった。同市島尾では、地元のコメ生産者が水路や田んぼに水が流れるのを見守り、



5月からの田植えに間に合ったことを喜んだ。写真。

現地に国や県、市の関係者が集まり、市土地改良区の江添良春理事長が「農家の皆さんには各地区ごとにバルブ操作や施設の管理に注意してもらい、秋にはおいしいコメが取れることを祈念する」とあいさつした。島尾管農組合の堀井重則組合長は「当初は今年の稲作作りにどう対応すればいいかと思ったが、ほっとしている。水管理をしっかりし、大切に使いたい」と話した。市内の農地には高岡市の五位ダムから引いた幹線や支線、末端の農業用水路を使って水が補給されている。22日時点で1216カ所で被害が確認されており、国や県、市が営農に間に合わせるため54カ所を応急復旧した。稲刈り後に本復旧作業に取りかかる。



## 氷見市被災者向け公営住宅調査

### 64世帯が入居希望

氷見市は26日、能登半島地震の被災者に行った住まいに関する意向調査の結果を発表した。回答した570世帯のうち、今後建設する災害公営住宅に入居を希望するのは64世帯(11.2%)で、分らない・決めていないのは69世帯(12.1%)だった。市は結果を基に住民との意見交換会を開催し、5月中旬に建設場所、規模などの案を作り、6月定例市議会に提案する。意向調査は被害の大きか

ため」と分析した。林正之市長は同日の会見で、同住宅について「本年度に実施設計し、来年度に建設を始める」と述べた。2026年秋までの入居開始を目指す。建設地は、市有地10カ所の通地調査を行っている。(小畑一成)

公費解体や防災など7億4068万円の補正予算を専決処分した。3月20日に終了した災害「仮置き場」のあいの森を30日に再開する。災害廃棄物処理事業費に3億4219万円、公費解体はこれまで5棟の緊急解体をしたが、5月から本格的に始まり、5、6月で80棟の処理費を計上した。液状化対策には4千万円を盛り込んだ。土質調査や7月以降の対策工法検討、対策地域選定などの費用で、10月以降に技術専門委員会を立ち上げる。(小畑一成)



バルブを開放して農業用水に水を通す関係者＝氷見市島尾で

## 五位ダムから取水開始

能登半島地震で被災した氷見市の農業用水で、国営幹線(27・1号)、県営支線(115・2号)に続いて末端水路(約千メートル)の応急復旧工事や放水試験が完了した26日、五位ダム(小矢部川水系・高岡市)からの取水を始めた。氷見市島尾では行政関係者や農業組合などから40人が出席し、農道にあるバルブを開放して通水した。あぜの点検や代かきをして5月前半に田植えをする。この日は市内300カ所のうち数十カ所で通水した。

### 氷見市・農業用水 応急復旧工事など完了

同市内では水路1216カ所のうち幹線、支線、末端を含め計54カ所で応急復旧をした。水稲作付面積1600haのうち、1haが水田の亀裂などで作付けが不能。このほか、液状化への不安や排水困難などの理由を含め、計15haで水稲の作付けができず、うち多くは耐湿性の高いハトムギや緑肥に転作する。秋の稲刈り後に本格復旧工事に着手する。復旧は2026年度内を見込んでいる。(小畑一成)

# 田植え例年通りに

## 能登半島地震 富山県氷見市のパイプラインと水路 応急対策完了 水田へ給水



【富山】能登半島地震で甚大な被害を受けた氷見市内の国・県営パイプライン(142㌔)と末端水路(約100㌔)は応急対策工事が完了し、26日から水田に水を張るための給水が始まった。例年通りのスケジュールで5月から田植えができ、農家や地元の人たちは安堵(あんど)の様子。国や県は秋以降、本格的な復旧工事を進める。

水を張ってから新たに被害が判明した場合は、国や県などが速やかに対応する。

この日は五位ダムの水が届く条件が整い、市内の各集落で田んぼに水を入れた。島尾地区では午前10時に水路のバルブを開放し、小さな用水を通じて田んぼが水で満たされていった。音を立てて水が流れる様子を、島尾営農組合や島尾自治会、氷見市土地改良区、国や県市の職員らが感慨深そうに見守った。

氷見市では、ダムから

水路のバルブを開放する  
氷見市土地改良区職員  
(26日、富山県氷見市で)

水を届ける国・県営パイプラインと末端水路の計1216カ所が被災し、国や県などが協力して調査と補修を進めた。地中に埋めたパイプが曲がって離脱し漏水した箇所など、今年の営農に間に合わせるため応急対策が必要な54カ所を工事し、市内の農地に通水できるようにした。

市土地改良区の江森良春理事長は「国や県など多くの人が休日返上で間に合わせてくれた。意地と底力を感じた」と感謝し、江さらいや草刈りに協力している自治会の中田正幸会長や新井隆志副会長は「本当によかった」とほっとした様子。営農組合の堀井重則組合長は「大切な水が漏れ出ないよう、あぜをしつかり点検したい」と気を引き締めていた。

本格復旧は収穫後の秋以降に着手する。市内には現在、農地のひび割れで作付けできない1㌔があり、転作などで対応する。

比陸近畿  
KANSAI  
KANSAI  
KANSAI